みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

序論：中国の社会変化と再構築：革命の実践と表象の視座

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 韓, 敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009028

序論——

中国の社会変化と再構築——革命の実践と表象の視座

韓　敏

一　近代中国の革命への人類学の問い

今年は北京オリンピック開催年であると同時に、中華人民共和国建国五九周年、社会主義集団制度の人民公社確立の五〇周年、一九六六年に始まり一九七六年に終焉した文化大革命の四二周年、新中国の主要な創設者の毛沢東の逝去三二周年にあたる年でもある。過去半世紀にわたって、中国は大きく変わっている。

革命は近代中国を貫通するもっとも重要なキーワードの一つであり、中国社会の変化を掲示するもっとも核心的な概念の一つである。世界の四分の一の人口が動員された二〇世紀の中国の革命は、為政者にとって大胆な実験であり、民衆にとって悲壮な社会実践であったといえよう。

新中国誕生以降、社会主義国家政権は、従来の社会構造、法制度、風俗慣習、道徳倫理、宗教信仰に大きな変化を及ぼし、社会主義革命はイデオロギー化され、日常的実践を通して中国社会に根を下ろし、近代史の中でもう一つの文化と伝統を作り上げている。社会主義市場経済への移行とグローバル化の今日において、社会主義革命の歴史と実践は完全に風化したのではなく、日常生活、観光、芸術、民間信仰などの分野で形を変えて再構築され、表

象され、流通されている。

本書は近代中国を貫通する最も重要なキーワードの一つである革命とその実践に関する最初の人類学研究であり、平成一五年一〇月から平成一八年三月まで開催された国立民族学博物館共同研究「中国の社会変化と再構築――革命の実践と表象を中心に」（代表：韓敏）の研究成果である。

編者が代表をつとめた上記の共同研究では、近代中国の革命を単に歴史の出来事としてみるのではなく、一つのシステムとして見なし、三つの問題設定を行った。第一は、社会主義革命がどのような言説や諸制度をいかに生み出しているのか？　新しく生み出されたものがどのように表象され、実践されているのか、第二は革命的諸制度と言説における従来からの連続性と断絶性を究明すること、第三は、革命的言説、諸制度、実践と表象が市場原理のグローバル化の時代において、いかに展開され、再構築されているのか、である。研究会において上記の命題をめぐってクロスオーバー的視点から研究と討議を重ねて、中国の近代革命――近代に生成したもうひとつの伝統、世界史におけるもうひとつの近代化を考察した。上記の三つの問題設定は本書の三部構成を成している。

中国に関する人類学においては、一九八〇年代に入ってから、社会主義革命後の中国社会の変化に関する研究が急速に増えてきた。革命後の中国に関する人類学の研究動向を概観するには、アメリカの人類学者のステヴァン・ハレルが *Annual Review of Anthropology* 誌に寄せた The Anthropology of Reform and the Reform of Anthropology: Anthropological Narratives of Recovery and Progress in China [Harrell 2001: 139-61] や、瀬川昌久が *Japanese Review of Cultural Anthropology* 誌に寄せた Anthropological Studies in Japan of Chinese Society: 1900-1997 [Segawa 1998]、末成道男が書いた Chinese Anthropology in Japan: A View from Inside[Suenari 1995]にくわしい。ハレルは共同体(communities)、生活とナショナリズムに焦点をあて、建国後、特に一九七八年の改革開放後の中国に関する欧米および大陸の人類学者の研究を詳しくまとめた。それに対して瀬川と末成は日本と西側の人類学研究の違いを意識しながら、日本における中国の

人類学研究の歴史と特徴をよくまとめている。上記の三つの研究概説は社会主義イデオロギーにもとづいて作られた言説、諸制度、人びとの実践と表象に関する研究を直接取り上げていないが、革命後の中国社会を考える上で大いに参考になる。社会主義革命後の中国社会の変化に関する人類学的研究は、英語圏や中国と日本において数多くの研究があるが、その多くは従来の伝統的諸制度の革命後の変化を取り上げているものの、そこでは社会主義革命を過去のものとみなし、社会主義イデオロギーにもとづいて新しく作られた言説、諸制度、実践と表象に注意を払ってこなかった。

本書は、革命による国民国家の建設と社会主義的国民文化の生成を正面から取り上げる。本書の基本的スタンスは人類学、民俗学、歴史学、文学などの学際的研究によって、トップダウンの国家言説・政策と民衆の実践という複眼的視点から、近代革命の中で、社会主義理念がいかにイデオロギー化され、制度化され、表象され、個人、家族、集団がいかにそれらを内在化し、急激な政治・社会変化に適応しながら、戦略的に親族組織、冠婚葬祭、民間芸能、民間信仰および地域社会を再編成してきたのかを取り上げる。

社会主義革命の実践と表象を人類学の研究対象にする本研究は、中国に関する人類学的研究において新しい研究分野領域を切り開くと同時に新しい研究視点を提供することができるだろう。

二　中国の革命の意味

現在の中国において「革命」という言葉は、中国古来の言葉としての革命と、英語の revolution の訳語としての革命の二通りの使い方がある。古来の言葉として使われる場合、「革」は動詞として使われ、「命」は天命を意味するので、革命は天命を改めるということになる。つまり、中国では王朝が替わることを意味する。すなわち王朝が

替わると天子は天の命を受けて位につくという考えがあり、天子が替わるのは天の命が改まるからだと考えられていた。ここで注意を喚起しておきたいのは、中国古来の革命の主体は、人間の天子でも民衆でもなく、万物を支配する抽象的な存在である「天」であるという点である。革命による王朝交替は本書の議論の対象ではないが、王朝交代の度に諸制度の持続と断絶が伴うことから、中国社会の本質として、近代中国の革命を考える上で重要である。

一方、中国古来の革命に対して、近代的意味での革命 revolution は、ラテン語の revolutio（回転、変動）に由来する。また近代的意味の革命は狭義と広義の二つがある。狭義の革命は、被支配階級が支配階級から政治権力を奪って政治組織・社会組織を変える、いわゆる政治革命のことを意味する。フランス革命や中国近代の辛亥革命、社会主義革命はこれにあたる。広義には、物事のある状態から他の状態への急激な変化一般を意味し、経済、法制度、文化、宗教、学問、芸術、言語、風俗、慣習などあらゆる社会領域での大変動を意味する。産業革命、情報革命、文化大革命はこれにあたる。本書では、近代的意味の革命における広義と狭義の両方を射程に入れている。

また、中国革命は通常二〇世紀の中国が中華人民共和国の社会主義政権樹立によって達成した政治、社会変化のことを指すが、中国革命は長期にわたって進行した過程であるため、一九一一年に王朝体制を倒した辛亥革命も、中国革命あるいは中国の近代性を考えるときに非常に重要である。したがって本書は社会主義理念にのっとった社会改革を扱うが、それに限定せず、辛亥革命を含む百年の近代中国の急激な社会変化一般を研究の射程に入れている。つまり、革命を近代国民国家形成の過程、近代化の過程の中で取り上げる視点である。革命はもう一つの近代化であり、中国の近代史とグローバル化の中の中国社会の行方を考える上で重要なキーワードである。

数億人が動員された中国の革命を人類学的に研究する場合、実践と表象は有効なコンセプトであろうと考えている。ここでの表象とは、象徴、あるいは物事を象徴的に表わしたり代弁したりすることを意味する。社会学者のデュルケム（Émile Durkheim）は、社会生活はそのすべてが表象（representation）から成り立っていると指摘している。デュ

ルケムは表象を個人的表象と集合的表象に分けて、集合的表象はあるグループのメンバーにとって共通の知的感情的な意味をもつシンボルを意味し、旗のような物質の形に表れるシンボルだけではなく、人が世界を見たり、世界に関連づけたりする方法を規制する基本的概念も含むとする。他方、個人的表象は集合的表象とは違って、個々の経験を意味する［デュルケム　一九七五］。グループにおいても、個人においても表象というものは、すでに形成されている実在を、言語、旗や服装や髪型のようなもののシンボルを通じて意味を生成する行為であり、その行為は個人やグループの主張や利益などに関わるポリティクスがある。本書で取り上げる転生、霊魂救済（謝論文）、軍服と軍便服（汪論文）、英雄像（武田論文）、女性像の成り立ちとその変化（牧論文）、毛沢東の象徴性（韓論文）、映画の中の文化大革命（西澤論文）、革命遺産を対象とする観光（東論文）などはいずれも個人的表象と集合的表象に関わる問題である。

本書のもう一つのキーコンセプトは実践である。ここでの実践は広義と狭義の二つの意味がある。広義の場合、理念の反対語としての行為を意味する実践である。狭義の実践は人間が社会と社会関係に対する働きかけを表し、倫理的、政治的活動を意味する。つまり、人間の社会関係に対する認識と働きかけである。本書の執筆者は複数のパースペクティブ［毛　一九六八、ブルデュ　二〇〇一、田辺　一九八九、田辺・松田　二〇〇二］から葬儀改革（何論文、田村論文）、親族制度の変化（秦論文）、風俗改革（塚田論文）、イスラム指導階層のライフヒストリー（王論文）、民間文化への国家参入と民間文化の再構築（井口論文、徐論文）、風水師の風水判断（渡邊論文）を取り上げ、社会実践の諸相と過程を検討した。

本書を貫通するもう一つの視座は、社会主義革命を経た国民国家と社会との関係である。アメリカの社会学者のチャールズ・ティリー（Charles Tilly）は、国民国家の形成を考える場合、ネーション形成（nation-building）と国家政権の建設（state-making）の二つの過程があることに注目し、ネーション形成は国民国家に対する国民のアイデンティ

ティ、参与、義務と忠誠などのような、国家に対する国民の意識的および心理的な帰属認識を含む。それに対して、国家政権の建設は国家権力の拡大、政権の官僚化、社会への政権の浸透性を意味すると指摘した［Tilly 1975］。本書は、社会主義革命によるネーション形成の過程に展開される国家と社会の関係に注目し、新政権が社会動員の手段としていかなる新しい英雄像（武田論文）、女性像（牧論文）、指導者像（韓論文）を生成し、いかにしてそれらを社会へ浸透させていったかを分析し、指導者崇拝から生まれた文化大革命時期の国民服＝「軍便服」の流行のメカニズム（汪論文）を検討し、社会主義革命によるネーション形成の過程という課題への複数の重要な切口を示した。また、一九三〇年代の国民党政権による「風俗改革」と五〇年代の共産党政権による「移風易俗」（塚田論文）、民謡「花児」とその祭りの「蓮花山花児会」における政府参与（徐論文）は、国家政権の建設の過程に位置づけられ、国家権力の拡大と社会への政権の浸透性を考える上で重要なポイントとなる。

三　本書の構成

本書は革命の実践と表象のテーマをめぐって、一　服飾・映画・アートにみる革命の表象、二　社会制度と文化儀礼の再構築、三　グローバル時代における革命の記憶と構造転換、の三部から検討している。

第一部では語り、服飾、映画とアートの側面から中国革命の実践と表象の諸相を取り上げ、五章から構成されている。

井口論文は民族音楽学（ethnomusicology）の「音の風景」（soundscape）の視点から陝西省北部の村の民謡と河北の楽亭大鼓という地方の語りに焦点をしぼり、声と音による「革命」の表象、技の伝承に関わる徒弟制度、高築遠のような民間芸能者による革命文芸の創作実践、政府の文芸政策を取り上げて、革命が芸能にもたらしたものについて

検討した。

牧論文は新しい国家的イデオロギーと革命的ジェンダー観を具現化している新しい女性像を取り上げ、文化大革命時期から現代までのアートにおける女性の表象に焦点を当てて、「鉄」と「花」で象徴されている男性性と女性性を取り上げ、「鉄姑娘」とよばれる画一化した革命の女性像は過度に男性を規範にする社会主義リアリズムによるものであると指摘した。

汪論文は、辛亥革命後の「中山服」を含めた近代服装の変遷の脈絡から、文化大革命時期の「軍服」と「軍便服」の形成過程を分析し、北京、瀋陽、武漢の三ヶ所で三六歳から七二歳までの知識人、幹部、労働者、二五〇人の間で行われたアンケート調査と統計データを用いて、軍服の普及度と軍服を着用した人びとの意識を考察した。三ヶ所にみられる軍便服普及程度の差異は、紅衛兵勢力の強弱、諸造反派間の武闘の程度に関連するとの指摘は興味深い。また、近代中国の服装は、為政者側にとっては政治理念と政権の正当性を視覚的に表象するものであるが、統治される側にとっては自分たちの意思を戦略的に表象する手段でもあったと指摘した。

西澤論文は中国ニューシネマの担い手である監督、謝晋、田壮壮と張芸謀に焦点を当てて、文革が中心的なテーマの一つであった彼らの作品『芙蓉鎮』、『青い凧』と『活きる』を事例に、そこで選ばれた三〇項の文革アイテム（大衆集会、革命歌、ラジオ放送、大字報、紅衛兵、忠字舞、武闘シーン、労働改造・上山下郷、毛バッジ、毛沢東語録など）を取り上げ、監督たちが何を選び、どう再現し、何を伝えたかったのかという細かい分析作業を行い、中国ニューシネマにおける革命そのものを問い直した。

共産党政権は建国以前から時代のニーズに応じてさまざまな英雄像を作り上げてきた。これまでに革命精神と国家的道徳のシンボルとされた数々の英雄の中でもっとも名前が知られ、もっとも長く宣伝されているのは雷鋒である。**武田論文**はアニメ、ポスター、子供向きの絵本などの図像を通して、一九六〇年代から現在までの政府、美術

家、絵本作家による雷鋒表象の変化を分析して、中国文化論の視点から革命の英雄美談と古典神話系譜における「愚者」の間に見られる話法の連続性、『世説新語』の中の奇人・怪人、近代文学の阿Qとの類似性を論じた。また、「雷鋒」のイメージが、毛沢東と共産党への絶対的忠誠、「人助け」から現在の「商売といえども公益を優先すべし、正直な売買をすべし」へ変化したことを指摘した。

第二部は六章から構成され、社会制度と文化儀礼の再構築について、政府の文化政策、親族制度の変化と持続、葬儀改革、霊魂救済・転生・風水などの宗教的実践や宗教的専門職者のライフヒストリーを通して、革命前後の諸制度と文化儀礼の連続性と断絶性を検討する。

塚田論文は広西の高床居住、不落夫家、歌垣などの風俗習慣を事例とし、一九三〇年代の国民党政府の「改良民俗」政策と、五〇年代の共産党政権の「移風易俗」政策について、書物、新聞記事、法令などの文献によって検討し、国民国家の近代化や風俗の革命をめぐる二つの政府の政策作りとその実施状況の異同点を比較し、二〇世紀中国の革命期における文化政策の連続性と断絶性を展望して、今日、我々が見ることのできる壮（チワン）族など諸民族の風俗習慣は、こうした改革を経て少なからず変化を遂げていることを指摘した。

何論文は一九五〇年代に北京に現れた八宝山革命公墓を取り上げた。八宝山革命公墓は、革命功労者や、生前高位のポストについた党政軍幹部の遺体をおさめた陵園であり、聖なる場とされている。葬儀・葬法の革命のシンボルであるこの公墓は、革命への貢献度と生前の肩書きにもとづいて階層化されたもので、後に同じような公墓が各地で模倣して作られるようになったが、現在、この革命公墓では死者祭祀が復活し、霊的信仰が再生産される現象が再びみられるようになったと指摘した。

田村論文は陝西省中部地域の公共墓地の利用と管理を事例に、死に対する革命とその具体的なあり様を考察し

た。「上に政策あれば下に対策あり」といった、国家政策と強固あるいはソフトな人々の抵抗という図式ではなく、社会における墓地制度の展開の視点から「死」の革命と近代化を検討し、推進者や代理者が複数介在する点に注目し、公墓服務中心と経営性公墓事務所を中心に取り上げることで、国家政策としての葬儀改革が間接化されるなかで人々の行為の産出を促す現象を提示した。

謝論文はダン・スペルベルの心的表象（mental representations）と公共的表象（public representations）の議論［スペルベル二〇〇一］をベースに、社会主義革命前後の四川省南部の人びとの冥界観念に影響を与えてきたと思われる四川地域の寺院・道観、城隍廟、酆都寺廟建築群などの宗教的施設における冥界観念の公共的表象、霊魂救済の儀礼的実践、とくに儀礼の担い手である宗教的職能集団「壇」の存在とその役割について分析を行った。また、死者儀礼の依頼人側の個々人の心的表象にも触れて、公共的表象と心的表象との連鎖や中華民族の美徳としての「孝」の再評価を検討した。

王論文は、新疆トルファン市のヤルバシ村、甘粛蘭州市の五星坪（ウシンピン）の霊明堂本堂、寧夏固原の三営鎮の霊明堂分堂、河南偃師（えんし）市の馬屯村などの四つのムスリムコミュニティを取り上げ、それらのイスラム宗教指導者のライフヒストリーを通して、中華人民共和国建国後の五〇数年間の社会変動と彼らの社会的地位及び役割について比較と分析を行い、生活史による二〇世紀中国革命に関する研究方法の有効性を提示した。

秦論文は、伝統的な家族・親族制度と儒教に対し、国民党政府と共産党政府が打ち出した一連の革命政策をふまえ、従来の出自論と組織論ではなく、個人を中心とした関係論の視点から湖北の伝統的な家族・親族関係及び解放後に起きた変化と連続性について考察した。親族理念という持続性の強い社会文化的資源を活用しつつ中国近代の政治経済的な激変の中を生き抜いてきたという柔軟性や強さが、一般民衆だけではなく、共産党政府の間にも共通に見られるという指摘が興味深い。

第三部は六章から構成され、グローバル化の時代における革命の記憶と構造転換について、観光、毛沢東生誕祝典、花児会、市場経済活動における風水実践の役割、漢服と漢服運動を含む中国の「民族衣装」に関する新しい動き、革命根拠地だった陝北地域の革命の語りから検討する。

東論文はデーヴィス（Fred Davis）のノスタルジアの論考を下敷きに、上海市において行った観光に対する意識および実態に関する量的調査のデータをもとにして、観光を表象の生産と消費の観点から捉え、革命表象を消費対象として志向する層がいかなるものであるかを示し、その志向が何によって動機づけられるかについても考察を行った。革命聖地観光は、海南島などの海辺のリゾート観光や雲南の少数民族観光等と比較すると、全体に興味を持つ人が少ないが、革命聖地観光に興味を持つ人が特に四〇代に集中していたという特色が見いだされたと指摘した。

韓論文は中国指導者であった毛沢東の生家である韶山で観察された生誕一一〇周年の記念行事に焦点を当て、政府主催の式典やコメモレーション（記念物）、民間の集団・個々人による記念行事や参拝行為を広義の儀礼として捉え、儀礼の空間に用いられたもの、表象行為、表象主体の語りを通して、象徴と象徴する個人の関係、象徴の出現と社会変化との関係性に注目し、グローバル化の時代における毛沢東の象徴のダイナミズムを解明した。

徐論文は甘粛省蓮花山地域に伝承する民謡「花児」とその祭りである「蓮花山花児会」を事例に、花児会禁止の文化大革命時期から花児会を「国家無形文化遺産代表作」候補にする現在まで、政府が民間文化に参与する方法、目的、更に政府参与による民間文化の変容を考察した。そして、花児会における政府の参与プロセスは花児会という民間文化にまつわる政府と民間が拮抗し、融合する過程であると結論した。

周論文は実証的な観察にもとづいて、グローバル化の中で出てきた漢族の民族衣装と中国人の民族衣装の問題について、「唐装」「漢服」に焦点を当てて、「民族衣装」が繰り広げている多種多様な社会と文化の実践や革命の表象だっ

た中山服の今日の意味を考察し、服装と中国人の民族的アイデンティティの関係、中国国内における少数民族の服装文化の隆盛と国際的なファッションの流れとの関連性を分析した上で、中国の「国民文化」の建設がいまだに完成されていないことを指摘した。

深尾論文は自伝的スタイルで、日本における文革の影響、高度経済成長下に大都市の近郊で育った一人の日本人学者が、どのようにして中国の革命根拠地であった黄土高原にたどりついたのか、といった一連のプロセス、大阪の近郊と黄土高原という異なる空間を往来するなかでえられた認識の過程を描き出した。同時に、現地の人々とともに取り組んでいる「生態文化回復活動」、植林・緑化普及の「黄土高原国際民間緑色ネットワーク」と「緑の使者」「緑聖」と呼ばれる朱序弼の事例をあげて、陝北革命の根拠地だった「革命言説」から今日の「緑色革命」への語り方の変化を指摘した。

渡邊論文は中国の政治、経済、歴史と文化にみられる表裏二様の相異なる構造を指摘した上で、「風水」という切り口から、中国における日常的実践としての風水信仰、風水師の風水判断を取り上げ、東アジアにおける知識としての風水の位置づけ、今日の中国の市場経済活動における風水実践の果たす役割を論じた。

結び

欧米における中国に関する人類学研究、あるいは日本における他の地域に関する人類学研究と比べて、日本における中国の人類学研究は、東洋史の学術伝統を受け継いだシノロジーの特徴がある［末成　一九八八：二二〇］。西欧人より日本人の方が中国の社会研究を早くスタートしただけではなく、蓄積も多く、細かいところまで研究されている［斯波　一九八八：二二〇］。これらの蓄積は日本人研究者だけが享受する遺産ではなく、世界の研究者の共有財

産となりつつあるし、またそうなるべきである。黄宗智の華北農村の社会経済史的な研究はそのよい例である〔西澤　一九八八：二九〕。

日本の中国人類学研究の歴史は膨大な知的財産を作り上げ、特徴のある学術伝統を作り上げていると同時に、ある種の慣性も生み出している。王崧興は二〇年前に日本における中国研究について次のような疑問を投じた。「日本の人類学は、やっと漢族、中国研究に一歩踏み出たところに、いちばん危険性のないテーマとして家族や宗族、村落をおさえている。さらに一歩進んだら、世界観とか宇宙観とか日本の中国学の厚さの壁にぶつかる勇気があるかどうか」〔王　一九八八：二二八〕。

二〇年後の現在、日本の人類学研究の課題と方法論に対する王の疑問はすでに現実となって表れている。日本の人類学における中国研究は東洋史の学術伝統を受け継ぎ、村落や親族の研究を続けながら、中国人の世界観や宇宙観のみならず、植民地、戦争、芸能、映画、観光移動などのテーマに挑戦している。本書のような、近代中国の歴史を貫通している主要な概念である「革命」を研究テーマとするものも現れている。

本書の新しい試みとしては次の二点にまとめることができるだろう。まず、研究課題と対象の変化である。本書で取り上げられている英雄像（武田）、女性像（牧）、革命遺産の観光（東）、革命指導者の象徴性（韓）、映画の中の「革命」（西澤）、服装の政治性とナショナリズム（汪、周）、民間芸能における政府の介入と革命の表象（井口、徐）などの課題は、新しい研究分野を切り開いたといえよう。二点目は研究の方法論と視座の変化である。指導者のライフヒストリーによるイスラム信仰の研究（王）、国民党政権と共産党政権の文化政策を比較し二つの政権の近代性の本質と民族文化の連続性を掲示した研究（塚田）、個人を中心とした関係論の視点からの親族研究（秦）、革命理念に基づく死の制度と仕組みの展開（何、田村）、死をめぐる冥界観念の公共的表象と心的表象、霊魂救済と孝との関連性に対する考察（謝）、政治と経済の動因としての風水研究（渡邊）、中国の革命をめぐる日本人調査者と中国人の被調査者

のインターアクションに着眼した研究方法（深尾）は、従来の中国研究に新たな視座を提示した。

歴史学者・人類学者の上田信は日本の中国学者を三世代に分けている。戦前に中国の現地体験がある第一世代と、戦後中国へ行けないなかで中国を西欧型の近代化と異なるもう一つの近代化、日本批判の原動力とした第二世代と、改革開放の結果、中国での現地調査が可能になった第三世代である［上田　一九八八：二二一］。中国の門戸開放、中国社会自身の変化、日中学術交流の増進、世界人類学の研究動向の変化は、当然日本人類学の中国研究に影響を与えている。一方、中国の改革開放は日本人の現地調査に新たな契機をもたらしたと同時に、日本の学術の雰囲気も中国から多くの留学生を引きつけている。留学生たちは日本で人類学の訓練を受け、徐々に日本の学術コミュニティの一部になりつつある。一九八一年に創設された「仙人の会」[1]はその例である。仙人の会は日本で教えたり、研究したりしている中国の人類学者に交流と互いの知的な刺激の場を与えるのに重要な役割を果たした［Segawa 1998: 15］。日本人学者と「日本留学組」中国人学者の関係は「研究仲間であると同時に、良きライバルとして切磋琢磨する［西澤　二〇〇六：一六四］仲間でもある。日本留学組学者の出現は日本の中国研究に量的変化とともに斬新な問題意識とパースペクティブをも提供している。本書の基盤を成している国立民族学博物館の共同研究会「中国の社会変化と再構築――革命の実践と表象を中心に」（二〇〇四年一〇月～二〇〇六年三月）はそのよい例である。その意味で本書は日本で活躍している日本人と中国人の研究者たちの共同作業による研究成果であるといえよう。

本書は革命の表象と実践の二つの枠組みから近代百年の中国革命の連続性と断絶性を検討してきた。「革命というものは本来、連続を否定して非連続な世界をつくろうとするものである」［貝塚　一九七三：九六］。しかし、「過去の歴史と似た条件の下で、似たような歴史過程が展開されることになる」［貝塚　一九七三：九六］。歴史の過程は常に変化している。変化は普遍的であり、変化の状態はゆっくりしたものと急激なものに分けられている。革命はその急激な状態の変化を意味し、従来の構造を打ち壊す脱構築の性質をもつ。その意味で二〇世紀に始まった中国の

革命はけっして特殊な社会現象ではない。今後、中国の革命に関する通時的アプローチが必要となると同時に、他の地域や社会との比較研究も要請されよう。

注

（1）仙人の会は、一九八〇年度日本民族学会関東地区懇談会の修士論文発表者を核心として、中国に関心を持つ研究者の学際的（専門分野、所属機関を含め出入り自由）交流の場として一九八一年五月第一回の研究会が開かれて以来現在まで続いている［末成　一九八八：九］。

参考文献

Harrell, S.
2001 The Anthropology of Reform and the Reform of Anthropology: Anthropological Narratives of Recovery and Progress in China. *Annual Review of Anthropology* 139-161.

Segawa, M.
1998 Anthropological Studies in Japan of Chinese Society: 1900-1997. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 1: 7-32.

Suenari, M.
1995 Chinese Anthropology in Japan: A View from Inside. In Suenari, M., J. Eades, J. & C. Daniels (eds.), *Perspectives on Chinese Society: Views from Japan*. Canterbury: University of Kent.

Tilly, C.
1975 *The Formation of National States in Western Europe*. Princeton: Princeton University Press.

上田　信
一九八八　「漢族における人類学の可能性」（斯波義信・末成道男・王崧興との座談）　末成道男編『文化人類学5　漢族研究最前線――台湾香港』京都：アカデミア出版会

王崧興

一九八八　「漢族における人類学の可能性」（斯波義信・末成道男・上田信との座談）　末成道男編『文化人類学5　漢族研究最前線――台湾香港』京都：アカデミア出版会

貝塚茂樹
一九七三　『中国の伝統と現代』東京：岩波書店

韓　敏
二〇〇三　「二一世紀の中国に関する人類学研究の回顧と展望――中国・アメリカ・日本のパースペクティヴ」『民博通信』一〇三：二二―二三

斯波義信
一九八八　「漢族における人類学の可能性」（末成道男・王崧興・上田信との座談）　末成道男編『文化人類学5　漢族研究最前線――台湾香港』京都：アカデミア出版会

末成道男　責任編集
一九八八　『文化人類学5　漢族研究最前線――台湾香港』京都：アカデミア出版会

スペルベル、ダン（菅野盾樹訳）
二〇〇一　『表象は感染する――文化への自然主義的アプローチ』東京：新曜社

田辺繁治
一九八九　『人類学的認識の冒険――イデオロギーとプラクティス』東京：同文館出版

田辺繁治・松田素二編
二〇〇二　『日常的実践のエスノグラフィ――語り・コミュニティ・アイデンティティ』京都：世界思想社

西澤治彦
二〇〇六　「日本の中国人類学をめぐる思索」『武蔵大学綜合研究所紀要』15号、東京：武蔵大学

デュルケム、E（古野清人訳）
一九七五　『宗教生活の原初形態』東京：岩波書店

ブルデュ、P（今村仁司・港道隆訳）
二〇〇一　『実践感覚　一、二』東京：みすず書房

毛沢東
一九六八　『実践論』北京：外文出版社